

平家物語圖會

後編

六

13  
2693  
12止





2693  
12世

金

平家物語圖會卷之十二

目錄

- 土佐房正俊堀河夜討伏誅義経都落難風吹戻とさむねと俊と堀河の夜討伏誅義経都落難風吹戻
- 南都ゆく三位中将重衡と誅する圖南都ゆく三位中将重衡と誅する圖
- 弁慶土佐房小同馬と堀河へ連行圖弁慶土佐房小同馬と堀河へ連行圖
- 頼朝卿日本國惣追捕使を賜ふ文覚流罪六代御前と斬頼朝卿日本國惣追捕使を賜ふ文覚流罪六代御前と斬
- 六代御前首の座へ文覚馬を飛し救ひ来る圖六代御前首の座へ文覚馬を飛し救ひ来る圖
- 平家物語圖會灌頂卷平家物語圖會灌頂卷
- 建礼門院御落飾吉田と小原へ御程住法皇小原御幸建礼門院御落飾吉田と小原へ御程住法皇小原御幸

平家物語圖會卷之十二





建礼門院尼寂光寺御幽栖の圖

彌陀如来引接の圖

○御往生

以上

平家物語圖會卷之十二目錄終

平家物語圖會卷之十二

東武 高井蘭山翁述

土佐房正俊堀河夜討伏誅義経都落難風吹戻さる

玄程の本之位中将重衡卿八狩野介宗茂の頼けと。玄幸も伊豆國に居

らんとす。南都より頼ゆや依と。さへ下さるべしと故源三位頼政卿の孫伊

豆藏人大夫頼兼の令と。奈良の大衆へ渡さしける。今度京都へ入ると大津にや

山科通り醍醐路を径と。日野近と通りたる。此北の方にも頼中納言惟実

卿の女五條大納言園綱卿の養女先帝の乳母ゆと。大納言典侍局とす。中

將一谷の生捕と成し。後先帝の附系せと。坐けるが壇浦ゆと。入水の如荒瀬に

る武士の囚らと。旧里に歸姉の大夫之位の同宿と。日野の居ゆと。中將守護

の武士の頼と。我々一人の子も。浮世の心置と。年来整りて女房

平家物語圖會卷之十二



今日野所在と伎今二度對面と後生のことも云置むとやさう夫の安んぬ  
るべくは立寄案内して北の方よりかえぬぬ藍摺の直垂折烏帽子  
着瘦黒と其入とも見えぬ互に涙の咽びる中將のさへ  
一谷ゆくといふもあつた牙の生うと囚に京鎌倉恥を晒さる南都  
の大衆のちの渡し斬る死とく越い変らぬ姿と今一度えんと守獲の武  
士の頼と糸の今も置とありはゆくと頭も剃度髪とくる身は傍る  
ど額の髪を掻分口の及野少々切は信ぬぬせよとく差かぬ北  
の方日未茶づけらるる今一はの歎やさう打臥ははひり良  
るくやさうハ二位殿越前三位の上のさゆ水の底中沈むりうた正  
く此世に坐ぬ入ともなげさご替らぬぬ女今一度え泰せんとのやと息なつら  
今日も存へいと今日を限と涙の滝をなりぬる中將の涙の海

ちぢまひのとと。裕の小袖の淨衣と添と出され。わんたき久をき  
束を是の信あり置ぬ。まふ火の筆の跡も。後の世までの記念ありと  
の現をかきと下中將は筆を止す。  
せえうひと涙のうろからえ後の形もだれぞ替ぬ  
北の方返すのみ

ねだろふるも今も何せん。うろを限の形見とつと  
契あは後の世に必も生れあひなる。つ蓮ゆと祈良日も願ぬ奈良へそ  
遠く武士の待らんもかろとくかまげれば北方袂の翅下はのや替と引  
留めあはさた終の存へ果ん牙のあはさたべのひ切と立とる。此世に逢ふも  
是限あるうろ北の方引被と臥ぬぬが喚位る声門の外遠とくやえられ  
中將も涙あは中とるうろにえ哉と。今悔しう思ぬ程南都の





南都  
三将重衛  
珠



大衆中將を替丸のりまふと命幾も抑山崩り大犯の悪人上二千五刑の中  
ゆも渡修因感果の道理極成せり。佛敵法敵の逆臣あまふ。東大寺要福  
寺の大垣を回らう。堀頭取ま死又屠ゆと斬べると決せざる。老僧茂の命  
幾もそと僧徒の法中を穂便るも。唯武士の賜と木津の切斬吏一と。  
つふ頼兼よ返けるゆ木津川の端の連行斬んとする。数千人の大衆守  
獲の武士。る人数万人立集る。あの中將來の侍。木右馬允知時ハハ  
條の女院兼参めくひひるが。最期をえまふんと。鞭を打とそ。馳りける。  
既ふうと云ぬ。馳着馬より。飛下千万人立圍。中を押分く。中將の傍に  
系。知時の冥期の辨。えまふんと。系まう。う。や。た。れ。が。志。の。程。神。妙。の。い。ふ。知  
時。約。り。罪。深。う。ま。え。る。ふ。冥。期。の。伊。と。折。と。ん。と。心。と。宣。ひ。る。承。く。の  
と。守。護。の。武。士。ふ。り。合。せ。近。を。里。う。り。阿。弥。陀。一。鉢。と。逆。河。原。の。砂。子。の。上。ふ。居。

知時狩衣の袖の枯と解。仏のゆのみ中將の整させまふ。時の中將仏に向ひ  
後。彼。凋。達。が。逆。逆。を作。り。八。万。藏。の。聖。教。を。焼。亡。せ。り。終。り。天。王。如。來。の。死  
別。の。類。も。可。作。の。罪。業。滅。ぶ。深。く。の。い。ふ。聖。教。の。値。偶。々。逆。縁。巧。む。還。と  
得。道。の。因。と。る。今。重。衡。が。逆。罪。を。犯。ま。と。全。く。愚。意。の。発。起。ふ。わ。り。唯  
世。の。理。と。存。ま。る。計。心。生。と。稟。る。者。推。う。王。命。を。蔑。如。せん。命。を。保。者。孰。う。父。の  
命。を。背。ん。彼。と。可。具。と。云。辞。ま。ふ。可。有。り。理。非。佛。陀。の。照。覧。の。あ。る。さ。は。罪  
報。立。地。ふ。来。運。命。今。と。期。と。も。後。悔。千。万。悲。く。も。猶。餘。り。あり。但。一。之。室。の。境  
及。ハ。慈。悲。と。以。て。心。と。す。る。故。に。法。度。の。良。縁。區。に。唯。圓。教。意。逆。即。是。順。此  
支。肝。の。銘。ぞ。二。念。彌。陀。佛。即。滅。無。量。罪。故。に。逆。縁。を。以。て。順。縁。と。し。唯。今  
最。期。の。念。佛。の。依。と。九。品。托。生。と。遂。げ。と。頭。を。た。き。討。せ。る。日。來。の。罪。行。ハ  
さ。る。と。あ。る。と。も。唯。今。の。ろ。と。あ。る。と。ま。あ。る。ふ。千。の。大。衆。守。護。の。武。士。皆。袖。袂



儒一多。頸ハ般若寺の門前ハ釘付あり。是ハ治承の合戦の時爰  
 打立く。伽藍を焼亡せし一故と傳へし。北の方針ヲ持せ。軀ヲ貫ひ首ハ大  
 佛の聖俊乘坊ハ頼ミ。大衆ハ之ヲ日野近死法界寺と云山寺ハ首ハ軀も  
 煙ハ骨ハ高野へ送テ。墓ハ日野ハ管み建。直ハ安を亦。里深と才ハ煙ハ  
 後世ト吊ハ多ハ。今ハ源氏の代ハ成テ。國ハ國司ハ後ハ庄ハ領家のまハ。多  
 然ト上下安堵の多ハ。然ルル七月九日午の刻斗。大地裂ク。動テ  
 良久。赤縣の内白川の辺ハ勝寺皆破テ崩。九重の塔も上六重ハ振落  
 得長壽寺院三十二間堂も十七間洩倒。皇居と始在テ。开ク神社佛閣栴の  
 民屋皆崩。其音雷の如ク。上る塵煙の如ク。天暗ク。日の光見え。遠國  
 近國もか。のど。山崩ク。川を埋海溢。濱を浸。漕船ハ波ハ洶。陸  
 豹ハ踏所ト失。大地裂ク。水湧。磐石破。谷ハ博。洪水漲。水も多。

高き岡ハ昇。助。猛火燃。来。川を隔。避。鳥ハ。多。
 空も翔。龍ハ。雲。井。京中六波羅白河其外。
 死者。炭。知。四大種の中ハ水火風雨ハ常ハ害。大地ハ
 於。異。変。成。今。度。世。の。失。果。世。の。滅。人。口。
 ころ。昨。日。今。日。も。多。老。少。死。法。皇。ハ。新。熊。野。ハ。御
 幸。成。花。入。折。即。變。觸。穢。出。急。死。御。
 還。御。南。庭。ハ。帳。屋。立。御。座。主。上。ハ。鳳。輦。召。池。の。行。幸。中。宮。宮。
 御。輿。御。車。他。所。行。啓。天文。の。博士。急。ぎ。内。女。子。の
 刺。め。大地。必。打。返。ヤ。怖。と。魚。昔。文。德。天。皇。齋。衛。三
 年。三。月。八。日。の。大。地。震。東。大。寺。大。佛。の。御。頭。重。落。せ。又。天。慶。二。年
 四。月。二。日。の。大。地。震。主。上。清。寧。殿。の。前。五。丈。の。帷。屋。立。座。と。兼。



是より上代るはつらつと此後にかるとも一と見せむ。十名の帝王都を  
 出さるひゆを海底に沈大臣公卿擣まてく。罪を渡さし首を切らし或  
 妻子別と遠流せらる。平家の怨灵の依り。世も夫果るやと悲まぬ人も  
 ありたり。同く八月廿二日高雄の文覚上人故左馬頭義朝のうへに頭と  
 尋かす頭の子。鎌田兼備が頭の子が頭掛させ奥東へ下りたる。まろ治  
 兼四年七月。謀叛と勧めゆえにさるる。髑髏つらふ。白布の包で包  
 故義朝の首とくまきし。恥と謀叛と記し。程なく世を討たむ。流  
 父の首と信せし。今又尋かす。持来る。是の義朝年来不便と加へ百  
 仕とる。紺襖の男。平治の後ハ獄舎の前なる。苔の下に埋し。後世吊る人も  
 あり。成時の大理小村と清右兼備佐殿今も流人。未頼母に死  
 又世の尋かす。東山圓覺寺に深う藏め置たり。成文覚尋

出。彼紺襖の男が相俱し。下りて聖今日鎌倉へと使ゆ。源二位  
 片瀬川の端を迎ふ。夫も喪衣の姿。出立し。鎌倉へ歸入聖へ大床  
 小立我方の庭に立。泣く父の首を清めぬ。哀なる。石巖峻を伐掃ひ新  
 る道場を造り。勝長壽院と号し。父の朝所とす。公家も相賀。左  
 少弁兼忠を勅使ゆ。故左馬頭義朝の墓へ内大臣正二位を益賜。頼朝卿  
 武勇の名譽長。身を立家を興す。亡父を贈位贈  
 官。及ぶ。希代の幸。九月廿二日平家の餘黨の都を皆討。平大納言時忠卿へ能  
 内藏頭信基。佐渡國中將時実。安藝國玄部補雅明。隱岐國二位僧。全  
 全真阿波國法勝寺執行能。上総國経福坊。周利。融田備後國中納言  
 律師忠快。武藏國と定らる。或ハ西海の波の上。或ハ東関の雲の果。後會其



期を弁へむ。別れの涙を押へつ。面々配牙へ頼ま。公の中推量らんと哀あり。中ゆも平大納言へ。建礼門院の渡らせ給ふ吉田の氣味暇之申上りて。昔の名残とて。足下斗敷しつる。遠を程へ給ふ上。推し情を掛向ふ人ありと。此卿へ。羽前司具信が孫贈左大臣時信公の子。故建春門院の兄高倉上皇の外戚。又入道相國の北の方八條二位殿も。姉ゆと坐し。兼官兼職心の儘ゆ。正二位大納言。成檢非遠使別當ゆ。三度成多。山賊海賊強盜を搦捕と。一々肘の本より。つくと打切追放。悪別當と人小い。是多。八島ゆ。院の使花方が。顔へ浪方と。焼印せ。此卿へ。故建春門院の餘波と。法皇も。公百八。是とも。かか。の悪行失敬。心憤も。涙を。判官又親う。ち。種。と。叶。けり。侍後時家と。十六歳。成子息。流罪。叔父宰相時光卿の許。

居ると。昨日。大納言の方。母帥典侍殿。俱。父の名。残。惜みける。大納言。終。別。公。強。言。内。心。少。る。年。漸。傾。昵。妻。子。別。果。住。別。云。井。の。餘。言。古。名。の。也。裁。路。の。旅。下。彼。志。賀。幸。崎。是。真。野。の。入。江。交。田。の。浦。大。納。言。位。ゆ。り。と。交。田。引。あ。り。目。ゆ。た。ぬ。我。涙。昨。日。西。海。の。波。漂。ひ。と。怨。憎。會。苦。の。恨。を。扁。舟。の。中。積。今。日。北。國。の。雪。下。埋。ま。愛。別。離。昔。の。悲。を。故。郷。の。雲。小。重。ぬ。ま。ま。わ。不。判。官。の。鎌。若。殿。大。名。十。人。分。と。け。る。内。不。審。と。蒙。ま。あ。と。假。公。を。合。せ。入。つ。皆。下。果。の。度。大。敷。切。の。義。経。何。の。子。細。も。俄。兄。不。快。の。中。と。上。入。下。萬。民。人。皆。不。審。が。り。け。る。其。故。此。春。攝。津。國。渡。切。の。舟。



の争論。大の朝らと一或堀原深く遺恨の多し。上又詔軍の先陣に地王と  
吐へざりし。狐狩怒晴ごとく。種々誘言を以て鎌倉殿を惑せし。鎌倉殿を  
判官の勢の附ぬ内。一日も早く討めをさせんと欲せし。大名家を差向へ宇  
治勢田の橋を引京都の強と成べし。ゆがせんと案どりぬ。又土佐房正俊と  
和僧物若ととて上京し。謀と討ぎやと宣へ土佐房畏と宿所へも帰せし。  
直に京へ上り。九月廿九日。上着。一々是夜。次の日。判官殿へ。あふ。判官  
を。武藏坊を以召す。弁慶已が馬。小撥乗せ。同馬。引連参り。判官の  
ふ。土佐房鎌倉殿。ふ。文へ。あふ。と。向。別の。ゆる。も。い。ぬ。ぬ。ぞ。ぬ。文。へ。あ。口。上。ぬ  
と。上。と。い。つ。ふ。當。時。都。も。静。ぬ。の。斯。と。あ。り。い。ぬ。ぬ。之。猶。も。能。守。護。せ。さ。せ。ぬ。と  
判官。と。左。へ。あ。り。と。義。經。を。討。止。さ。る。ぬ。使。ぞ。大。名。方。向。ら。し。宇。治。勢。田。の  
橋。も。引。京。都。駈。し。つ。らん。和。僧。物。若。あ。の。躰。ゆ。と。穴。耦。と。討。と。あ。り。し。らん。

土佐房大の愕。何ゆ依と唯今さるゆるい。是は聊宿願のゆゆ。熊野若  
小上。と。と。と。其。時。判。官。景。時。の。誘。言。ゆ。依。と。鎌。倉。中。へ。入。ら。し。と。追。上  
さ。し。つ。らん。土。佐。房。其。ゆ。ゆ。い。ぬ。ぬ。い。ぬ。ぬ。正。俊。ぬ。於。て。君。へ。對。し。存。る。旨。ゆ  
え。判。官。怒。と。左。て。も。右。と。も。鎌。倉。殿。ぬ。ゆ。と。い。れ。し。ゆ。あ。る。と。そ。と。怖。し。た。辨  
白。正。俊。二。日。の。雪。を。道。ん。る。某。君。へ。不。忠。を。存。せ。さ。る。旨。紀。清。文。差。上。ん。と。く。居。る  
七。枝。社。神。社。の。宝。殿。へ。納。め。又。火。燒。と。飲。め。と。と。免。れ。帰。り。大。番。衆。を。催。し。集  
其。夜。頃。と。寄。ん。と。判。官。ハ。磯。禪。司。と。云。白。拍。子。の。娘。静。と。云。女。を。寵。愛。せ。し。らん。  
静。傍。を。片。時。も。立。ま。さ。ず。静。中。々。大。略。へ。皆。武。者。ゆ。ゆ。の。御。内。り。催。し。ら  
る。らん。小。尾。程。と。大。番。衆。の。噪。ぶ。を。う。あ。り。ゆ。の。根。尾。八。登。の。紀。清。法。師。が。所。爲。と  
受。い。人。を。つ。ら。し。せ。い。つ。と。六。波。羅。の。故。入。道。相。國。の。召。仕。れ。る。禿。童。を。二。四。八。召  
仕。し。成。二。人。と。せ。ぬ。程。程。程。を。帰。む。女。中。く。苦。し。か。る。ゆ。ゆ。と。と。端。女。一。人





土佐房正俊



土佐房正俊

辨慶土佐房  
同馬堀川  
連行



見せぬまは。頃て走り歸木九童二人。土佐房の前切臥らして門の前  
に鞍置馬九引立内の大幕引。皆甲冑を帯り弓押張夫買。今  
み打出入奔ぬ。判官さへこそ。太刀おとす。静養背あて。投擲  
言同様。馬の鞍置中門の口引立。判官打乗門あけ。と  
押角を今や。と待多入。土佐房混曹。四幸騎堀河義經の館へ押角を  
咄と作。判官撥踏張立上。大音の夜討。軍中。義経を  
討て死。日本國。受ぬ物。と。馳廻。馬當ら下。と。皆中。周  
き通。伊勢三郎義盛。佐藤四郎。衛忠信。江田熊井。武  
る。二人當千のま。あ。この宿。會。六七十騎集。と。  
土佐房へ。極。寄。大半討。正俊。命。鞍馬の奥。入。居  
判官の故山。彼師。次。目判官。僧正。谷。居

と判官縁立土佐房を大庭引居。汝が際。義経を討んと。  
能もひ。我木曾。平家の敵を亡せ。と。  
我の敵せん。汝を命。千人。一つ。所。今  
を。と。私。志。神。今  
命惜。助け。鎌倉。と。宜。土佐房。口。宣。  
哉。鎌倉。命。右。斎。殿。の。二。疾。首  
列。と。頃。六。河。原。引。斬。者。足。立。新  
三郎。と。雑。色。の。者。百。仕。と。鎌。倉。殿。判。官。附。れ  
一。が。内。九。郎。が。参。勤。を。我。知。せ。土。佐。房。斬。と。夜  
を。鎌。倉。下。此。由。和。と。鎌。倉。殿。大。驚。馬。舎。宗。範。頼。討  
を。命。急。き。と。成。頼。不。辭。一。中。も。叶。入。と。宣



ゆゑ力及ぶ物具しと。暇やふ事なれば殿も又九郎が暴動をさす言ひ  
 多る洞の怖と物具脱置京上りての苗を全く不忠をせり。一日の紀清文十杖  
 づ書夜毎の壺の内ゆく墳上く。百日の千杖の紀清を書き。事とせらばはた  
 叶む。頼朝竟み討たぬ。次北條四郎時政の六方餘騎を差添て討つ。上  
 せとくとやへし。判官宇治勢田の橋を引防んた。勢田とては緒方三郎維  
 義ハ。平家を九國の中へ入む。追出さむ。勢田の者も我の頼朝とて宣へを  
 左のり。内内の菊池次郎高直ハ。年来の敵で。間給り。父斬て。後頼朝を  
 とけし。判官さうり。賜とる。おと六条河原へ引出と斬る。其後維義領  
 掌を。同十月二日判官院森し。大藏卿泰經朝臣を以て奏聞せられん。  
 頼朝郎等たが諺言の依と。義経を討んと仕。宇治勢田を固め。防を  
 存い。とも。京都の噪とも成らん。然を先鎮西の方へも落行む。と存い。表れ

院廳の御下文を給つ。下らむと願とる。法皇此のい。あんと。必  
 百煩のせのひ。諸卿の仰合と。下。義経都。在。東國の大勢乱と。入京  
 中の騒動絶す。く。皆く鎮西の方へも落行の。其恐もい。下。と。故。さ  
 むと。鎮西の者。緒方三郎維義を始。臼杵。戸次。松浦。黨。至。を。昏  
 義経。下。知。小。隨。へ。見。院廳の。下文を。賜。明。る。三。日。卯。の。刺。都。の。聊。煩  
 も。成。ぎ。波。風。を。も。立。せ。下。其。勢。五。百。餘。騎。ゆ。と。下。ら。む。と。る。  
 頼朝卿日本國惣追捕使を賜。入。文。覺。流。罪。六。代。御。前。を。斬。し。む  
 我。の。旗。津。國。源。氏。太。田。太。郎。頼。基。を。使。鎌。倉。殿。中。違。と。下。ら。む。人。を。左。右。に  
 我。門。前。を。通。ぎ。ま。り。矢。一。筋。射。んと。し。勢。六。十。餘。騎。河。原。津。ゆ。と。追。討。せ  
 戦。入。判。官。其。後。あ。り。餘。さ。む。討。や。と。五。百。餘。騎。を。と。中。の。蘊。ん。ぐ。討。れ  
 多。る。由。郎。の。過。守。討。と。我。身。を。負。う。と。引。れ。が。防。夫。討。と。者。ま。と。



二十餘人分頭を切掛させ門出りと軍神の衆悦の閑を揚と其日撰列大物の  
 浦小着羽翌四日船ゆく下らと一折節西風烈しく吹く松を住吉の浦へ打  
 上らと一夫より吉野へ籠らと一吉野法師の攻らと奈良へ落奈良法師  
 小も攻らと又都へ飯上と北園の掛りと終小奥列下らと一具せられ  
 十餘人の女房連六住吉浦小捨置と松の下砂の上小袖片敷位居る住吉の神  
 官憐れ乗物は立京へ送り居義経宗徳と頼と一猪方三郎維義信太  
 三郎先生義教備前守行家ホが乗る船た此所彼所の浦へ鳴く打と一  
 互小其形衆を知と一急風吹く平家の怨霊故といへり  
猪曲るを云云傳海と新中納言和盛の始門の幽霊と  
 弁慶の初る此 同七日北條四郎時政六万騎を相具と上落と八日院系と  
 伊与守義経備前守の家信太三郎先生義教皆追討の院宜給る  
 頼朝のいと奏聞と後皇頼と院宜を下とぬ去二日義経中清小但せ頼

朝小背くを院の院下文を成と八日院義経討て免由の院宜を下とる朝  
 小変り夕小変と唯世間の不定跡と一免此免と去程小鎌倉源二位殿より日  
 本園摠追捕使を賜と別段小米粮米宛行と一公家へ下と一法皇  
 仰め昔も朝敵を平げとる者小半園賜ると云と無量義経小免と一  
 小も左様のとらと一免例と一免頼朝と一免中状哉と一諸卿小仰合と一  
 小諸卿一同食残と一頼朝中より知道理半と一由力及せと一免赦と一  
 諸園小守護を置替庄園小地頭を補せと一うも一うも一毛汁も隠と一免  
 うりる録倉殿かちつのとを公家小も人言と一吉田大納言小御方御  
 中と一此卿ハ美ハ人小竹小其由小平家小結と一  
 強り後式ハ文をとり使者を立種と一此卿ハ左も一平家の時  
 後皇を鳥羽殿へ押籠と一後院の別當を置と一八條中納言長方卿



此経房卿二人補せられける。權右中弁光房朝臣の子なる。十二より流るる。一は昇  
 進帯ぎ之事の願要を兼帯し。夕郎の貫首を経參茂大弁太宰帥由納  
 言大納言迄人を我我た。頼らるる。人の名悪難の囊を遠く。隠るる。  
 言大納言迄人を我我た。頼らるる。人の名悪難の囊を遠く。隠るる。  
 子孫男を正し。復さず。尋せき。革ハ。牙望清ハ依べし。と觸るる。名京中の者ども  
 勝負ハ知り。我らも尋せし。後ハ下膳の子も色白く。眉目も。何の中將殿  
 の若君。彼少將殿の公達を云と。連れる。父母歎き。并に。彼ハ乳母の長女妙妙  
 の女房を正さるる。中。水ハ入土の埋。長ト。この押殺し。刺殺也。北条も。是を美ト。云  
 少。長ト。尋求る。処ハ。遍照寺の奥大覚寺と云。山寺の北。曾蒲谷ハ北の  
 方と若君姫君。忍び坐せと告る者。早速軍引連。彼住家を取巻。鎌倉殿の

代官北條四郎の迎ふあり。疾六代殿を渡す。いと。母上夢の公地。ゆと。  
 物も。是の。存藤五存藤六走。廻と。伺ハ。武士四方を打圍。道ト。ヤさん。乃  
 ぞ。母上若君を拘。唯我を失へ。と叫び。北条も。哀れ。世も。未許る。む。の。ハ  
 え。どの。北条清。九。上。六。別の子。細も。い。ま。疾。か。い。と。入。れ  
 む。六。代。母。上。ハ。武士。打。入。を。方。見。き。ぬ。根。た。い。ん。終。ぬ。道。る。を。あ。わ。ん。疾。業。で。普  
 も。あ。く。北。条。と。か。ん。暇。を。と。帰。を。あ。り。い。ん。痛。入。袂。せ。ぬ。と。感。め。ぬ。を  
 い。そ。い。母。上。あ。り。若。君。の。物。着。せ。御。髪。撥。撫。黒。木。の。数。珠。の。些。う。美。い。を  
 ぬ。か。し。い。う。ゆ。も。成。ん。を。是。ゆ。と。念。佛。中。極。樂。へ。来。と。打。伏。は。ぬ。若。君。母。上。の  
 唯。今。別。と。あ。い。せ。い。今。の。う。ゆ。も。と。父。の。坐。を。知。へ。る。度。を。い。ぬ。宣。ふ。十。の。若。君  
 我。も。あ。い。と。先。か。ん。と。あ。い。を。乳。母。引。出。け。ね。御。典。を。寄。を。六。代。御。前。十  
 二。歳。袖。の。間。漏。疾。を。隠。し。敵。の。多。へ。渡。り。ぬ。存。藤。五。兄。弟。左。右。の。附。添。を。置。ぬ。と



北の方の御歎大方をぞ。夜小入とも聊寝多。乳母の御もなるとぞ。や狂氣  
 のどく大覺寺を扮出。足小住せと泣あき。或人餘り痛しきふりけり。  
 是より奥高雄と云山寺の文覚上人とやへ。鎌倉殿大なるの聖に。そは上臈  
 の子を弟子の欲がらむと教へり。乳母の嬉しく。直小高雄へ尋入。聖に向ひ  
 泣く次第と語り。六代殿の御命を清多の御弟子めたり。下さしとて歎き轉  
 びたる。文覚哀めとゆふ先尋りんと。六波羅小至り。北条の逢と。様子を  
 向る小鎌倉殿の仰。平家の子孫女の格別。男子の洩さて尋がし失へり。  
 中ゆも維盛卿の子息六代八年も長。平家の嫡と。故中御門新大納言成  
 親卿の女の腹と。ゆいゆも尋がし失へ。仰ひいと語り。聖六代御前小見  
 せんとも。是を嚴し。生止中。城小凡と。末の世ゆい。る怨敵と。あ  
 るとも。是を爭失と。る。北条小向ひ。此若君を。え。い。る。宿

縁也。愚僧切小弟子。ゆ。清んと。廿日の命を。延賜。鎌倉へ。来。り。ゆ  
 と。入。向。心。豫。く。頼。朝。一。期。の。間。ハ。聖。ガ。子。と。云。ふ。叶。へ。ん。と。宣。ひ。し。ん。と。も。忘。ま。り。あ。り  
 ト。其。曉。待。付。と。立。ま。る。存。藤。兄。弟。ハ。聖。を。生。身。の。佛。と。云。ふ。合。掌  
 して。拜。ま。る。叔。母。の。乳。母。ハ。聖。の。初。頼。母。也。大。差。又。歸。れ。母。君。を。以  
 小。堪。へ。の。洞。瀬。へ。も。身。を。沈。ん。と。出。る。小。行。あ。ひ。聖。の。工。成。中。と。云。ふ。是。小。公。を。死  
 車。乳。母。の。も。立。歸。り。の。處。へ。存。藤。五。弟。の。文。覚。鎌。倉。へ。出。立。を。言。付。け  
 ら。し。く。禪。室。に。止。ま。り。限。り。悦。多。公。を。死。車。へ。入。り。廿。日。の。日。數。夢。の。間。ハ  
 過。さ。ふ。沙。汰。身。を。死。車。へ。入。り。在。京。ま。り。死。小。あ。む。と。云。ふ。北。條  
 四。郎。時。政。十。二。月。十。七。日。曉。六。代。御。前。を。具。し。京。都。を。立。出。り。存。藤。五。兄。弟  
 も。差。添。り。北。條。兼。督。降。り。馬。小。乘。と。い。ふ。最。期。の。御。供。小。公。苦。し。ま  
 る。と。云。ふ。步。躑。ゆ。と。下。り。ま。る。が。駿。河。國。ゆ。も。ま。り。千。本。松。原。と。云。ふ。處。小。公。を。昇

平家物語卷之二十一

十四



居させ。六代御前敷皮の用意をせしめ北條馬より飛下ぬ側へ来り申  
 乃めく聖の逢人と存置は具しと申ども其影もえぬと山のおろこことハ  
 鎌倉殿の公中も謀ごとの六近江國ゆき失ひをせしと披露せり。一葉牙  
 感のぬ身も置不推やともらそ叶ひのやととやけは。若君左右も宜む存  
 藤五兄弟を召汝等帰京し大覺寺へ系とも我乃ゆと斬れりととべし  
 言ぬも隠さるまじと申ども正しう此を様を被。歎けり。後世の障とも  
 りん。鎌倉を送り送りとやべしと宜ハ二人は涙ぬは仰ぬへと。若  
 君のぬ宍期を召届と後生と都へ歸り上りて存のぬぬと涙を流  
 しけ。若君今ハ斯とえし時。御髪の前かむわし。美しにを以て前へ  
 撥救ぬを守護の武士をえあそ。あねいと惜みおとぬのかをせよとて皆  
 體の袖を濡し。若君ハ西に向ひしを合せ。高声ハ十念唱らる。首然

延とけ。太刀取狩野工藤三親俊太刀引側め左の方を若君のぬ  
 後の立廻り。きと斬んとしけ。最惜と餘目と消と。刀をつくぎ  
 所をあらと前後不覚なるぞ。太刀を投棄他仁へ仰せと下ととて退  
 たるあつた推彼とと擇ぶ処の文是墨深の袖の玉袴。月毛の馬の鞭を揚  
 と馳せり。急ぎ馬と下。若君を之清の御教書是と差せと披と。ハ  
 中將維盛の息六代尋ゆる由然。是た文是坊之清と。弟子の成んと。疑  
 疑り。聖へ類渡さるべし。北条四郎殿へ頼朝とみと。御判明ら。北条推  
 續と。神妙くと。若君を與の兼文是渡し。と。存藤五兄弟北条の  
 郎等を悦び涙の咽びる。叔北条文是の向ハ九日の日延ハ京ぬと。夫  
 り。と。是非なく。今誤らんとせり。何んか。延  
 る。と。聖心不審あそ。と。鎌倉殿仰ぬ父の中將殿度。軍の大





平家物語繪巻第六十二



平家物語繪巻第六十二

十六



將より一久。推りた叶ふやどとあり。此聖が公を破り多る。争ふ真加  
 坐とた。さきく悪口迄やつた。猶も叶つとく。那須野の狩ぬらひ  
 直の狩場の供と。色くやと清く。さきとくそくへ。舞やと。さきとく  
 北条も聖の慈悲を感とける。文覚直の上洛依。北条へ鞍置と牽せし。紫  
 昏の存藤五兄弟を殺。我身も惜く。送りと。頃と鎌倉へ歸り。母上の清  
 方。廿日。何の音信も。日と歎き。沈。穴早。此世ぬる。入。心  
 多。文覚ハ尾列。勢田ゆ。今年も暮。正月五日の夜。都へ着。二條。猪熊。大覚  
 の宿所も。先是。落。直。夜半。大覚寺の門を。更。出  
 来る人。若君。日来。飼。狗。築地の崩。走。尾を振。向。出  
 若君。母上。つ。小。と。宣。存藤。五。業。内。知。築地。を。明。て  
 入。母上。始。人。さ。昨日。今日。人の住。一。幹。も。あ。命

惜く。母上。今。一度。目の。今。生。何。と。何。魚。と  
 多。其。夜。と。俟。明。一。里。人。尋。若君。の。内。大。佛。若。多。心。  
 正月。中。の。長。谷。寺。の。龍。と。存。藤。六。急。長。谷。へ。由。直。  
 小。都。へ。大。覚。寺。へ。入。若君。を。目。と。夢。現。早。家。宣。  
 文。覚。を。二。向。長。谷。寺。の。親。世。音。を。眼。親。拜。心。地。と。合。掌。と。あ。  
 涙。咽。び。多。文。覚。惜。と。出。家。と。直。高。雄。迎。母上。と。月。  
 親。音。の。大。慈。大。悲。罪。あ。も。罪。も。助。け。あ。上。代。小。と  
 六。代。生。立。十。四。五。の。成。比。眉。目。秀。麗。威。儀。九。を。せ  
 母上。世。が。世。が。當。時。の。近。衛。司。と。あ。の。成。と。悔。あ。そ。餘。り  
 の。鐘。倉。殿。便。宜。毎。高。雄。の。聖。が。并。六。代。の。人。若。君。朝。を。相  
 一。多。朝。の。怨。敵。を。も。平。げ。父。の。恥。を。清。む。死。仁。め。と。と。け。を。



文覚坊是八向底もあら不覚仁ゆくのぞぬ公安と返すのせきとけとて。鎌  
 倉殿猶も心のぞ氣ゆと。謀叛起さ頃と方入もぞ聖とさうちみら頼朝二期が  
 間ハ推う傾くを子孫の末ハちとむと宣ひたる母上此う一竹多ひ建とく中さ六  
 代御前十六の文治五年の春。美は黒髪肩の廻り小枕落し。神の衣袖の袴  
 笈の用意し。修行ぬからと一六存藤五兄弟同ト出立ぬと供のありたる  
 先高野ぬ上り。善知撒せ。瀧口八道ぬ汎遇父ぬ出家ぬ臨終の芥末く尋ぬぬ  
 父ぬぬ跡懐し。熊野へあふ。濱の宮と申王子の御前と申父の渡ると一山  
 鳴の嶋へ渡り。渡るととらるる風向ひく叶と。我父ハ何困ぬ沈み果  
 るひんと。白波小向やなく。濱の真砂も父ぬ骨やんと。袖ハ涙ぬ絞と。潮  
 汲海士の衣とどの燥間もろくえぬ。渚ハ一夜経よみ念佛し。明と後近くの  
 僧小田向を頼と都へ歸りよとぬ。其比の主上ハ後鳥羽院ぬとすくけるが。

御遊の宗と一ぬ。政道ハ向卿の局の儘も。人の愁歎止せ。兵王劍客を好で  
 天下ぬ疵を蒙る輩絶せ。楚王細腰を愛せ。宮人の飢と死する者ヨリぬ。孟  
 子の初め上の好所ハ下見と。甚しぬのありと宜す。世の中酒宴遊真実ぞ  
 何とろく危きぬ。二宮と申政道を専らと一ぬ。心学文忌と申文覚ハ  
 怖しぬ聖ゆと。綺中ぬ正成綺ひいうぬも。此君を位ぬつねとぬ。是も  
 頼朝卿坐る程ハ心ひ立と。建久十年正月十三日。頼朝卿五十三ぬと失ぬ。八  
 文覚頃と謀叛を起ささるるぬ。忽渡ゆ。二条猪熊の宿牙ハ在。八十餘と。頼  
 捕と隠岐國へ流ささるるが。我く老の波立と。今日明日を知ぬ。牙と。下ハ勅勘  
 むと。都の片邊ぬも置と。遠く隠岐流さる。杖杖冠者。そ少女とぬ。いさる  
 めも我流さる。園へ迎へ取ぬぬ。成と。蹴場と。く。やささる。

後鳥羽院ハ故高倉院四の宮ぬ。皇ぬぬ孫と。餘と。杖杖の王を愛と。



せのひしゆゑ。文足球杖冠者と罵る。其後兼久の謀叛記をせのひし  
 困もまた元鎌倉北条家の沙汰とし。徳岐園へはさき多ひに宿縁の  
 程ぞ不意残る。其困ゆく文覚が亡天荒と怖しをてた言り。又文  
 覚が立んとせし二宮も。故高倉院の皇子ゆと。平家擒まり西海の漂ひ  
 のひしが平氏亡びと歸り入るひの方と。

借も六代ハ三任禪師と。高雄の奥行ひ澄一坐るが鎌倉家の沙汰さる人の  
 子しる人の弟子も頭ハ刺とも公刺多し。石捕と失ひきり。公家へ奏聞やさる  
 ゆゑ安判官資兼の仰と。捕さる。関東下らる。後河内住人岡部權守泰綱承  
 と。相模園田城川の端ゆと。竟ハ斬とる。十二より三十餘るは命を保と。今  
 くるりて。平家の子孫永く絶ゆり  
六代命をぬく数年の命延りし程を  
 後世やと長谷六代と云はる

平家物語語圖會卷之十二終

平家物語語圖會灌頂卷

建礼門院公落飾吉田より小原へ移住

建礼門院ハ東山の麓吉田の片辺の中納言法印慶惠と。奈良法師の坊住荒  
 と年久しを立入と。庭の草深く軒の慈草茂り。簾絶風露  
 ゆと。雨風堪へくも。花の色と熏へども。主と憑人も。月ハ夜く指入と。  
 詠と明も者も。昔ハ玉の臺を堂に。綿の帳ハ纏と明。暮し多ひが。  
 今ハるる。人ゆも別と果と。滾より死朽坊ハ栖ゆと。今ハるる。今ハるる。  
 憂る。波の上松の中。中ハ恋し。石けり。蒼波路遠し。西海千里  
 の雲ハ寄。白屋昔深うと。候を東山一度の月ハ落と。悲し。文治元  
 年五月一日。長樂寺の阿澄坊の上ハ印誓を戒師ゆと。髪下し。布施ハ  
 先帝の直衣を。是ハ今期迄も。石ハ移香も。失さる。形ハ見



せんとも。西海より持せぬ。いづるらん世迄も。ぬ身を放しとる。まどもぬ布施  
お引ぬん物もろ。且ぬ言提のるぬ。このぬ心あり。上人をえと泣く。ゆ  
と。う。頻く。幢。小。縫。せ。長。樂。寺。の。佛。前。小。掛。ら。ぬ。女。院。八。五。中。女。御。の。言。音。  
十六中。后。妃。の。位。小。備。也。廿。二。中。皇。子。の。生。天。子。の。國。母。と。也。入。道。相。國。の。ぬ  
女。の。世。の。用。以。采。光。の。限。を。盡。さ。し。也。今。の。ぬ。心。ぬ。人。と。海。の。沈。し。ぬ。先  
帝。二。位。殿。の。ぬ。面。影。ひ。と。ぬ。身。小。添。と。い。ふ。らん。世。小。忘。る。也。露。の。ぬ。命。何。ぬ  
今。迄。存。へ。う。る。う。を。目。え。る。と。ん。と。ぬ。涙。の。絶。る。間。も。ろ。五。月。の。短。夜。夜。も。目。睡  
と。明。難。多。也。昔。の。と。る。夢。ぬ。さ。ぬ。覽。成。ご。壁。小。背。る。残。の。燈。影。幽。小。於。夜  
窓。打。暗。き。雨。の。音。寂。し。う。り。上。陽。入。が。上。陽。宮。小。閉。ら。し。悲。心。も。是。ぬ。下  
と。ぞ。ん。へ。ぬ。故。の。主。が。植。置。う。り。え。盧。橘。風。う。り。う。軒。近。く。蕙。で。る。ふ。山。郭。公  
二。声。三。声。音。信。々。也。女。院。故。を。と。る。た。ぬ。召。出。と。ぬ。視。の。蓋。ぬ。か。け。た。る

郭公たもろの多成る。ゆら昔の人ぞを死  
女房は言く。武士の捕ら。旧里の帰。老るも若るも。或も安を替。或も  
形を寔し。ぬあもあ。ぬさ。ぬ。あ。ぬ。も。子。ぬ。谷。の。底。岩。の。と。ぬ。あ。明。暮。一  
ぬひ。住。居。一。宿。の。過。都。落。ぬ。煙。と。立。の。ぢ。り。う。空。く。死。跡。ぬ。残。を。贖。ぬ  
野。遠。と。成。つ。え。別。一。人。の。向。来。も。ろ。仙。家。も。帰。と。七。世。の。孫。小。逢。え。ぬ。か。く  
と。と。え。へ。と。ま。え。ぬ。七。月。九。日。の。大。地。震。ら。り。別。と。築。地。も。崩。也。御。所。も。い。と。と  
傾。ぬ。破。也。離。の。草。敷。糸。の。破。ぬ。う。り。も。露。け。折。知。が。ぬ。ぬ。声。ぐ。深。行。秋。と  
怒。も。漸。夜。長。る。也。ぬ。寐。覚。え。が。ら。ぬ。明。一。も。ぬ。情。を。掛。札。ぬ。あ。ら。る。人。ち。え  
ぬ。雅。育。も。ま。も。べ。た。ぬ。え。ぬ。冷。泉。大。納。言。隆。房。卿。の。北。方。七。條。修。理。大。師。隆  
卿。の。北。方。も。常。ぐ。る。向。や。さ。と。り。女。院。の。昔。此。へ。の。大。目。も。小。願。ぬ。た  
露。も。ぬ。寄。け。り。物。を。と。ぬ。ぬ。涙。を。流。さ。れ。ぬ。此。処。も。猶。初。近。く。王。許。の。道

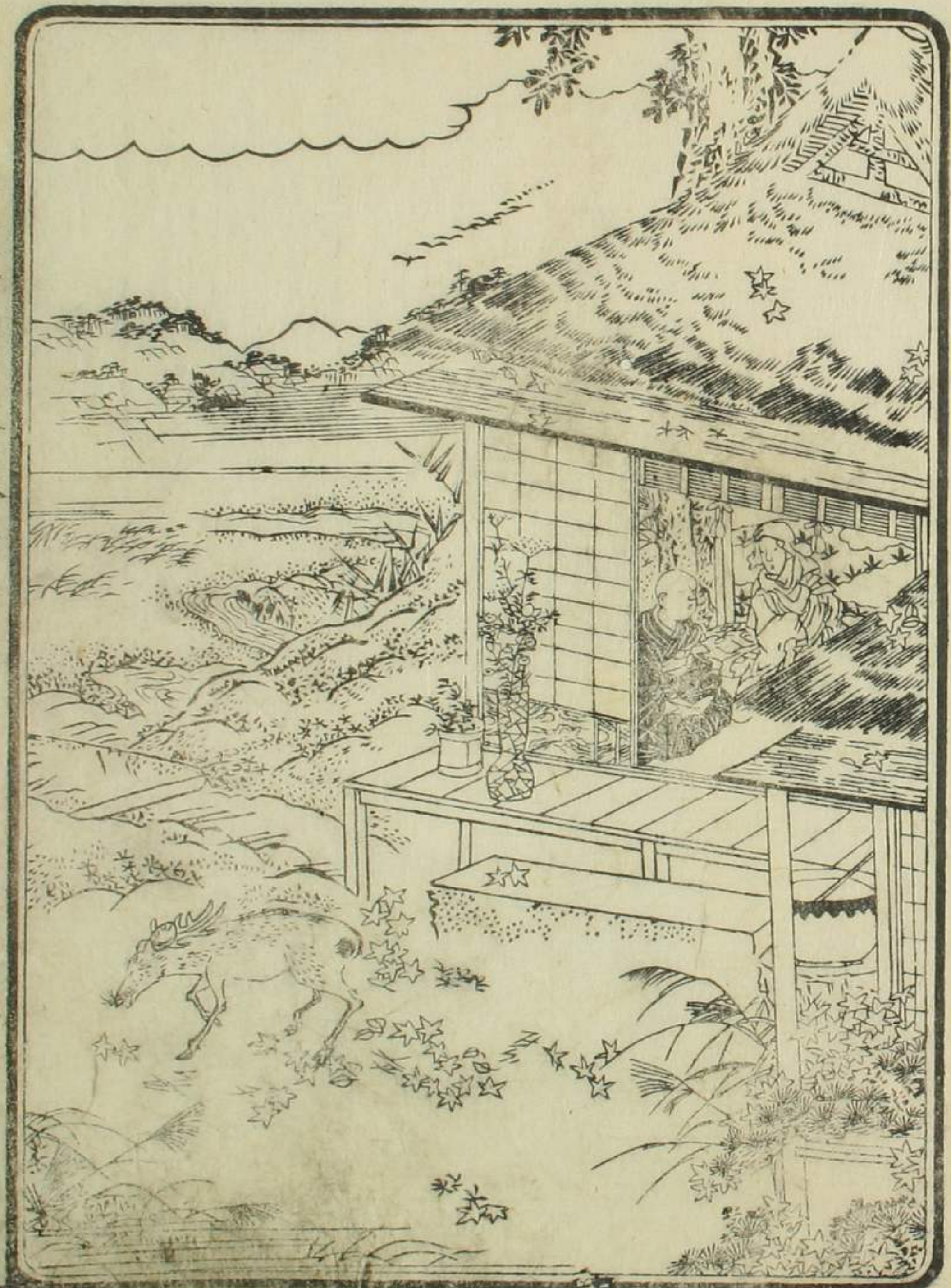


行人の目ほろろと露の命の風を拵んわら。夏憂とせぬ深山の奥の奥  
もへんせあんと。是より北小原山の奥寂光院とて所こそ雨のいと人の  
あつゝ山里の物も寂しげ。世の憂るの栖よらんところ。思召させぬ  
興さる隆房信隆西卿の北の方より沙汰あり。文治元年長月の末つこ  
寂光院へ入る道もぐるも四方の梢の色くならぬ。心覚ゆるさす  
山陰まよわぬ日漸暮くやぬ野寺の鐘の入相の音凄く分る草葉の露  
茂るの心増す嵐烈く木葉狼ざり空撫曇のつら打時雨。鹿の  
音幽小音信と。奥の怨も絶く左右取集る心細と喻かた方も  
浦傳ひ嶋つみせしうも。ささかふみりしのをと思召るも衣を佛の  
前へあはせむひと。天子聖灵成等正覚二門亡魂頓登菩提と祈りし  
給ひたり。川の世も忘るひごる先帝の心面影と心算の添と明暮

心涙絶さるる。寂光院の傷の方丈ある心庵室を結び一間を佛所定め  
一間の寝所を修理昼夜朝夕の心勤め長時不断の心念佛解るとも  
月日を送せぬひとり。かゝく神無月中の五日暮方庭みちをく櫛の葉を  
物踏鳴しやへと。女院世を厭ふ所何者の向あるからん。あまんと  
せんく小鹿の通るぞと。女院いさくくと仰々不附やせし大納言  
典侍局候をもちと

岩根ふみ推る向ん櫛の葉のそとら麻の漉るころ  
女院此歌餘り哀めり。石窓の小障子ぬ遊し留させぬ。うら心徒然の中  
あも心石準ふるたはば中ゆを餘りあり。軒ぬ並ぶる樹を六七重寶  
樹と象と。岩間積る水を八功德水と思ふ。終常ハ春の花風雨  
散安く有煙秋の月雲の友つと隠安し。兼陽殿の花を詠し朝更風来と





建礼門院  
寂光寺  
御座  
御座

平家物語繪卷之十三

九二



薰を散し。長秋宮の月を泳ぎ夕ふ。雲霞と光を隠す。昔の金殿玉樓  
 錦の茵蓐。今の蓬門柴扉怪の敷襖。餘所の袂も濡し。法皇の建礼門  
 院尼小原の池閑居。向よりさくさく。文治二年の春。二月五月の程に  
 嵐烈く餘寒盡ど。峯の残の雪白く。谷の水柱解るま。夏ぬも成北祭を  
 過し。法皇夜をあめと。小原の奥へ御幸する。を心びのころ。徳大  
 寺殿。花山院殿。土御門殿以下。公卿六人。八人。北面少くひひり。鞍馬通り。然  
 御幸し。清原深養父が補陀落寺。小野皇太后宮の旧跡。觀覽する。夫の  
 心裏め石ま。遠山の樹も白雲に散り。花の形。又。昔葉ふ。の梢ゆち  
 春の名残ぞ惜まる。比の卯月廿日。餘のころ。夏草の茂が木を分け。あ  
 め始る御幸。御覽し。列る方も。人跡絶る程も。石知ら。と  
 哀れ。西の山の林鹿。一字の御堂あり。即寂光院。是。旧く。造作せる。木立由ある

さる。豊茂破と。霧不ぬの香を焼。扉落と。八月常住の燭を挑と。さう乃  
 さる。成や。庭の若草茂合。青柳糸を乱す。池の浮草波。小深。人錦を  
 曝と。参る中島の松。ゆる藤浪の。うら紫の。閑る色。青葉。交。父。の。煙。櫻  
 初花。も。珠。岸の。餘。咲。乱。八重。雲の。絶。間。山。郭。公。の。一。声。毛  
 君の御幸を待顔。法皇。を。獻。見。み。く。ぞ。遊。あ。と。名。所  
 池水の汀の櫻散。浪の花。盛。あり。と。是  
 昔。岩の。絶。間。も。落。来。る。水。の。音。又。故。由。有。る。所。に。緑。羅。の。垣。翠。黛  
 の山。繪。の。書。と。も。筆。も。及。さ。し。女。院。の。池。庵。室。を。獻。見。あ。ふ。軒。の。書。朝  
 白。這。柳。の。垣。衣。交。父。の。萱。草。飄。草。屢。空。草。顔。淵。の。流。く。藜。藜。深。鎖  
 兩原憲。の。樞。を。濕。ま。も。智。つ。べ。板。の。草。目。も。扶。疎。ゆ。時。雨。も。霜。も。雪。路。も  
 渡月影。の。争。ひ。の。木。べ。た。さ。さ。り。の。後。の。山。前。の。野。也。小。條。吹。噪。世。の



立ぬ牙のちりひとと。うら節滋き竹桂。都の方の言傳ハ。周遠不若る猿  
 垣や。僅ぬと。知のさる。峯の木。猿の聲。賤の斧の音。薛葛音  
 葛葉。來人稀る。所ハ。法皇人。や。あ。と。百々。と。も。ぬ。若。中。者。も。す。良。良。て  
 老衰。う。尼。入。ま。り。う。女院。ハ。何。困。御。幸。り。と。仰。さ。る。此。上。の。山。花。摘。み  
 入。せ。る。ふ。と。の。と。り。さ。て。世。を。厭。み。心。習。と。云。ふ。ら。左。様。の。と。不。仕。さ。る。人  
 も。ぬ。ぬ。ぬ。痛。め。う。こ。そ。と。仰。さ。る。此。尼。中。々。五。戒。十。善。の。心。果。報。を。さ。さ。る  
 の。依。と。今。う。る。ぬ。め。ぬ。逢。せ。ぬ。ぬ。ぬ。捨。身。の。行。ぬ。ぬ。ぬ。心。を。惜。せ。ぬ。ぬ。ぬ  
 免。因。果。経。ゆ。り。欲。知。過。去。因。見。其。現。在。果。欲。知。未。來。果。見。其。現。在。因。と  
 免。多。り。過。去。未。來。の。因。果。を。豫。と。悟。せ。ぬ。ぬ。ぬ。は。や。く。心。歎。ぬ。ぬ。ぬ。昔。悉  
 達。太子。ハ。十九。ゆ。伽。耶。城。を。出。檀。持。山。の。麓。ゆ。木。葉。を。聯。ね。と。膚。を。隠。し  
 嶺。の上。で。薪。を。採。谷。の。下。と。水。を。掬。び。難。行。苦。行。の。初。ぬ。依。と。あ。そ。遠。成

等正覺。一。多。の。と。や。多。此。尼。ダ。形。勢。を。心。覽。ま。さ。る。牙。ぬ。絹。布。の。分。も  
 ぬ。ぬ。物。を。取。衣。と。ぞ。着。う。る。あ。ぬ。ぬ。振。ぬ。も。ち。う。の。工。成。り。も。不。必。残  
 さ。る。と。思。召。ぬ。ぬ。ぬ。者。ぞ。と。仰。さ。る。此。尼。さ。あ。と。位。と。誓。一。ぬ。返。辭。ぬ  
 も。ぬ。ぬ。ぬ。良。き。と。涙。を。押。へ。憚。り。ぬ。ぬ。ぬ。故。少。納。言。入。道。信。西。女。阿  
 波。内。侍。と。者。ゆ。ぬ。母。ハ。紀。伊。二。位。さ。も。心。籠。深。く。と。そ。の。心。御。覽。と。立。坐  
 さ。せ。ぬ。ぬ。ぬ。此。の。衰。ぬ。程。の。心。知。ぬ。ぬ。と。袖。を。顔。に。押。當。と。ぬ。ぬ。ぬ  
 ぬ。ぬ。ぬ。目。も。當。ら。ぬ。法。皇。實。も。ぬ。阿。波。内。侍。ゆ。ぬ。心。覽。と。忘。さ。さ  
 せ。ぬ。ぬ。ぬ。何。る。も。唯。夢。と。の。心。百。と。心。涙。苗。ぬ。ぬ。ぬ。供。奉。の。公。卿。殿  
 上。人。も。不。必。殘。の。尼。よ。と。心。理。さ。る。と。各。感。と。合。さ。る。と。彼。方  
 此。方。觀。覽。ぬ。ぬ。庭。の。千。種。も。推。踏。ぬ。離。ぬ。倒。れ。と。外。面。の。小。田。も。水。越  
 と。鳴。起。隙。も。さ。さ。と。女。院。の。心。庵。室。へ。さ。さ。障。子。引。展。觀。覽。ぬ



二間より來迎の二尊必空。中尊の御みゆり五色の糸を掛らば左の普賢の繪像右の菩薩和尚兵衛先帝の御影をり。八軸の妙文九帖の御書も置き置り。蘭麝の薫り引くと。香の煙ぞ立并ふ。彼浄名居士の方丈の室の中。二方二千の床を並べ。十方の諸佛を清く。終ひえぬ。斯やと受け。障子より諸行の要文。大色紙の御書。牙ぶ押とる。其中大江定基法師が借涼山へく。縁ト。うらえ。坐歌遠聞狐雲上。聖衆來迎落日。前夜書き置り。少く引除く女院の御製と見えく。

心ひききる深山の奥の栖居。雲井の月を餘りみえん。さく傷を敷覧わらぬ。寝所と見えく。竹の心干の麻の心衣。紙の食衣。ど摺り置り。ゆき本朝漢土の妙なる類敷を盡し。綾羅錦繡の粧もさ。さく夢ゆぞ成ぬ。法皇の涙流とせぬ。供奉の公卿殿上人も親え。

工た。今の根も。皆袖をまがく。さく。や。上。の。山。も。濃。墨。深。の。衣。多。く。う。ろ。ろ。尼。二。八。岩。の。鉄。路。を。ゆ。ひ。つ。下。煩。ひ。る。根。る。る。法。皇。あ。は。い。ろ。ろ。者。と。仰。え。老。尼。涙。ま。ら。花。笛。臂。み。羊。躑。躑。丸。具。持。せ。ぬ。女。院。の。頼。み。藏。折。添。と。持。つ。鳥。飼。中。納。言。維。實。の。女。五。條。大。納。言。國。綱。の。養。子。先。帝。の。乳。母。大。納。言。典。侍。局。と。や。も。あ。ま。と。位。多。法。皇。の。涙。を。流。さ。せ。ぬ。供。奉。の。公。卿。殿。上。人。も。皆。袖。を。濡。さ。と。る。女。院。の。世。を。厭。む。習。ふ。云。々。今。く。ろ。ろ。様。を。く。え。あ。く。せん。恋。し。く。消。も。失。を。と。石。た。ら。も。さ。る。宵。々。毎。の。厨。伽。の。水。掬。ふ。袂。も。絞。り。交。る。暁。起。の。袖。の。上。山。路。の。露。も。ほ。く。と。絞。り。交。る。後。の。山。も。帰。ら。せ。ぬ。又。の。庵。室。も。入。せ。ぬ。座。も。忙。然。と。せ。ぬ。ま。さ。く。所。内。侍。の。尼。参。り。花。笛。を。給。ひ。多。く。世。を。厭。む。習。ひ。何。子。古。う。い。た。早。く。心。え。糸。も。還。御。成。さ。せ。い。と。申。け。女。院。御。涙。を。押。へ。と。の。庵。



室のへむ座も一念の念のまゝの。撰取の光明を期し。十念の榮の樞也。  
聖衆の来迎をこそ待つる。外の御幸なると。此の念の榮の樞也。  
此の念の榮の樞也。此の念の榮の樞也。此の念の榮の樞也。  
欲界の六天未五衰の悲を免む。各見城の勝妙の樂中間禪の高臺閣。  
夢の裏の果報又幻の間の樂。既流轉無窮。車輪を廻さず。天人の  
五衰の悲。人間もひひる。あやうも推する。何れも何れも。  
さそ古をばこそ。召出さめ。仰々。女院何方。音信もも。  
む。信隆隆房の室家。絶く。送る。こ。其昔あの人。育む。  
あ。露も。寄。者。涙を流さ。附。  
女房達も。皆袖と濡さ。良。女院涙と押。や。今  
く。成。一旦の歎。及。後生菩提の。

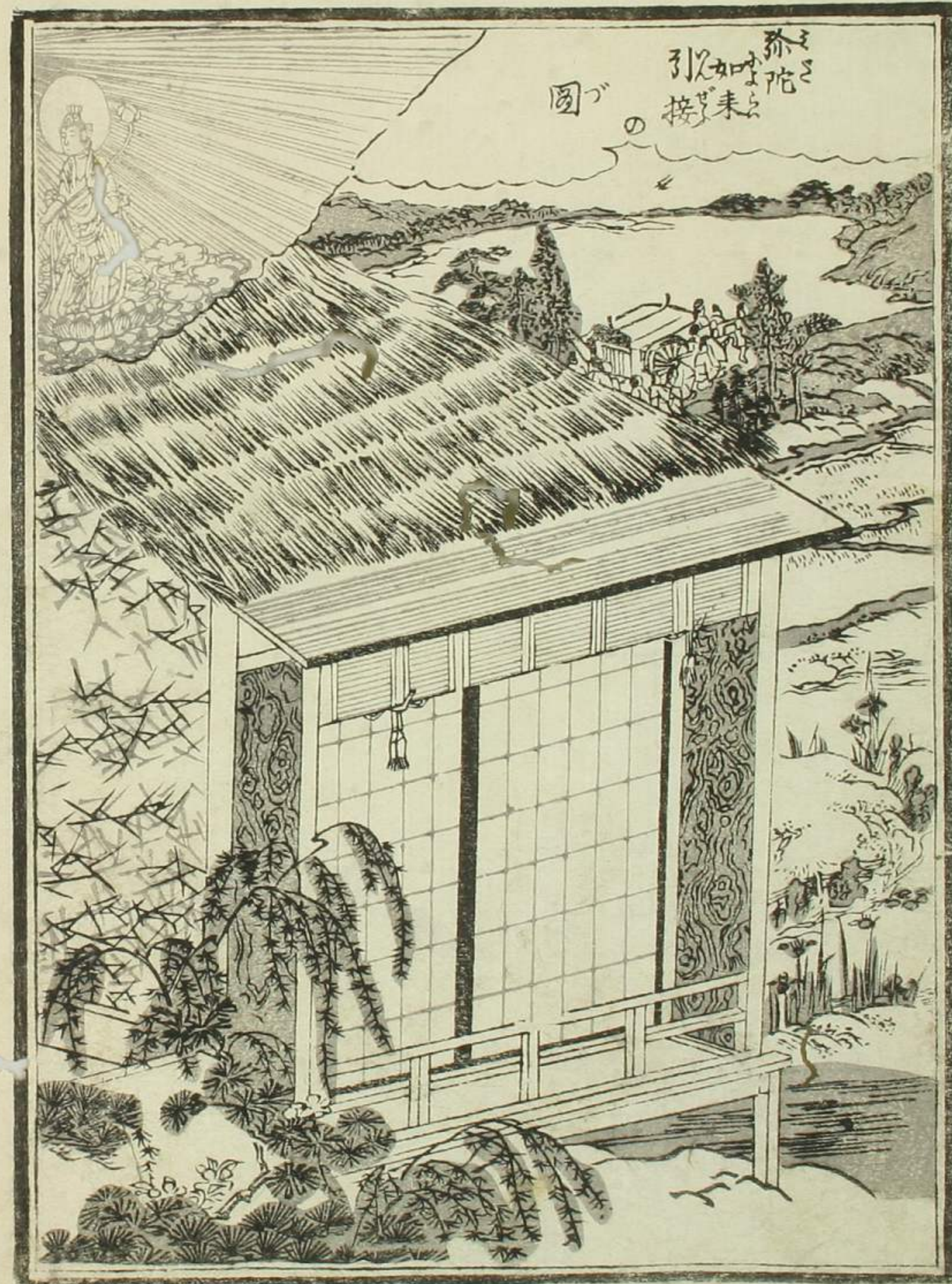
賢の忍ち釋迦の遺宗。列。泰。弥陀の本願。衆。ト。五障。二。後の  
の苦。戒。三。時。六。根。を。清。一。筋。九。品の。淨。刹。を。願。専。ら。一。門。の。菩  
提。を。祈。常。聖。衆。來。迎。を。期。何。の。世。も。忘。先。帝。の。回。景。  
忘。ん。と。ま。忘。ん。と。忍。ん。と。忍。ん。と。唯。恩。愛。の。道。程。懸。  
く。る。と。さ。彼。の。菩提。の。朝。夕。の。勤。怠。と。は。是。も。然。死  
吾。知。識。と。笑。い。と。や。さ。皇。御。ち。夫。吾。困。栗。散。の。土。と。い。も。  
泰。も。十。名。の。餘。薰。不。答。萬。衆。の。主。と。隨。分。と。心。叶。と。い。も。  
あ。ん。づ。佛。法。流。布。の。世。生。と。佛。道。修。行。の。志。後。生。苦。所。疑。ひ  
あ。や。ト。き。と。人。間。の。化。習。今。更。驚。を。央。の。心。た。ゆ。根。を。  
せ。の。方。あ。そ。い。と。涙。せ。あ。と。女。院。天。子。の。困。母。の。一  
折。拜。礼。の。春。の。始。公。事。品。佛。名。の。暮。攝。祿。以下。の。大。臣。公。卿。持



成也。一乃極六欲四禪の雲の上ゆく。八萬の塔天の圍繞せしむる根の  
 百官悉く仰ぬ者もいなき。清涼紫宸の床の上王の簾の内み歎待さ。春の  
 南殿の櫻木を留と日を暮し。九夏三伏の熱き日ハ泉を掬んとて憂を  
 秋の雲の上の月を独えとを宿さる。玄冬素雪の寒を夜ハ襖を重ぬと  
 暖くも。長生不老の術を願ひ蓬萊不死の藥を尋も。唯久しくん工  
 を心ひ天上の果報も。是又下とこそ。又ちひが。さても詩永の秋の始  
 木曾義仲とてみ恐も。門の人住別一都を。雲井の餘牙み顧る。故郷を  
 焼野が原と打泳。古の名をのぞき。須磨より明石の浦坊ひささう哀の  
 笑たる。是又漫く。秀大海の波路をさく袖を濡し。夜ハ例嶋の千鳥と鳴  
 明し。浦嶋の由る処たえひ。うた。故郷の工成忘とどく。寄方うり  
 一ハ五哀必滅の悲とてそ。又ちひが。凡人間の工。愛別離苦。怨憎會苦。

若ハ苦茂の初と。我牙み知也。残る牙もいなき。叔も筑前國太宰府の  
 着少い心を延ひ。小緒方とてや九圍の内をも追はさ。山野廣くやせ  
 乃。立休らふ。え所もわき。秋の成ひ。昔の九重の雲の上み。一月を八  
 重の潮路み眺と。明。暮し。内。清経中將。源氏京都を攻落さ。鎮西を  
 猪方み追也。網み羅し。魚のおとく。道もあつと。海み沈み。い。是を  
 憂。工の始。ゆ。波の丘。日を暮し。船の中。夜を明し。貢  
 物も。供御を備る。とも。適供御を。水。大海の  
 停ち。潮。飲水。又。餓。道。苦。是。明。暮  
 困。の。谷。城。を。各。直。衣。束。帯。と。引。替。鉄。を。延。く。身。明。て。暮  
 とも。軍。喚。の。声。絶。る。と。ち。り。修。羅。の。廟。以。帝。杖。の。聲。も。是。過。下  
 と。夫。そ。一。の。谷。と。攻。落。さ。と。後。親。ハ。子。か。ら。正。妻。と。夫。別。也。







僕も約き松を敵の船と肝を消し浪の音に敵の舟の声も成  
 ずし。門司赤間壇浦の軍。既今今日を限とえし。二位の尼位に  
 今今いふと笑ゆる。今度の軍も男の命生残りよ。千五百も  
 縦ひ又速き縁に生残りとも。我は後生用りても。昔  
 女に殺ぬ習ひる。いふも。存へ主上の心菩提も。我は後世を  
 助成と申ひ。夢の心地。兵方入丸。二位の尼先帝を  
 弟を海に沈し形勢。目も眩も消果忘と。忘と。生残  
 り者。喚叫ひし。大喚。無間。阿鼻。焰の底の罪人も。死  
 過りと。親も六道を生きたる。死し。罪業いふ。牛。後世の  
 かく捨身念佛。聊う。大罪を滅し。露の命の消ん。後世の宮の  
 外他。法皇の仰。異國の玄奘。三藏の悟の前。六道

を見死。我朝の日藏上人。藏王権現の心力に依と。六道をえり。と。そ。親  
 親。心。見。せ。ら。る。あ。そ。却。と。罪。障。消。滅。を。う。り。い。ん。と。打。款。せ  
 り。

御往生

寂光院の鐘の声。今日も暮ぬと打知。夕陽西に傾。必名残を竭せ  
 び。石。と。け。と。と。涙。を。押。と。還。御。を。せ。ぬ。ひ。り。女。院。を。何。も。昔  
 を。心。に。石。と。せ。後。に。え。忍。む。ぬ。涙。の。袖。の。ま。が。み。塞。あ。と。せ。ぬ。後  
 後。状。違。御。覽。に。送。つ。と。還。御。も。漸。延。せ。ぬ。庵。室。の。障。子。か。く。佛  
 佛。の。御。前。に。勤。め。あ。り。く。り。天子。聖。灵。成。等。正。覺。一。門。亡。理。障。子  
 提。と。祈。り。と。給。ひ。り。昔。恋。し。ぬ。餘。り。ぬ。庵。室。の。障。子。か。く。そ  
 遊。



此おろろ何あらむとて我公大宮人の意しうらん

古もあふちりみりとうるは。業の編戸も久くうら

又御幸の供奉せと。徳大寺左大将実定公。必庵室の柱

古の月小喻し。悉くさど。その光を深山遠の里

女院来方行末の嬉しうけり。石積必涙咽せぬ折節山

郭公二声三声音信と通りぬる女院

いざあか候らる。郭公。我も浮世小立言とのぞ

抑壇浦ゆく生疎せと。九餘人の面。或は首刎。或は遠流池大納

言の外一人。命を生都置置。四十餘人の女房。親類所縁引渡。三

上の玉の簾の下。風静る家も。下へ賤が伏居の位。塵治る宿も

多。枕を双し妹背も雲井の餘所。成果。立し親子も。方ぞ別れ

ける。見入道相國上人を恐る。下へ萬民を顧む。解官停任死罪流

刑。あ儘行きて。致所。父祖の善悪必。子孫あ及ぶと疑ふ。と

女院の例。臥せ給ひ。豫めひ放け給ふ。佛の

ひ懸置。五色の糸を懸。念佛。弥陀の引接を願ひ。念

佛の御声漸弱らる。西小紫雲。變。異香室。満音。空小声。建久二

年。二月中旬。一期終せ。大納言典侍局。阿波内侍。右宮の御位。片

時離。附。心。抱。疎。佛事。の。宮。逐。面。龍。女。正。光。の

此跡を追。章提希夫人の如く。皆正念往生を遂ら。と。平家。二千餘年

栄花の夢も。あふ至。覺盡。源氏の世。今を日の出の盛。来。千

来。千。年。も。源。氏。も。天。下。を。治。め。実。目。出。度。也

平家物語圖會權頂卷大尾

平家物語圖會權頂卷大尾



江戸

高井蘭山翁校合

山下可志磨淨書

江戸

有坂蹄齋翁画圖

井上治兵衛彫刻

平家物語圖會

全部十二卷出來

嘉永二年己酉九月癸亥

林書

大坂

河内屋茂兵衛

同

河内屋藤兵衛

江戸

大坂屋茂吉郎

書林

京都寺町通佛光寺

河内屋藤四郎

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 貳丁目

須原屋新兵衛

同 南傳馬町壹丁目

山城屋政吉

同 下谷御成道

英文藏

同 大傳馬町貳丁目

丁子屋平兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

大坂心齋橋筋本町角

河内屋藤兵衛

大坂心齋橋筋博愛町角

河内屋茂兵衛版



